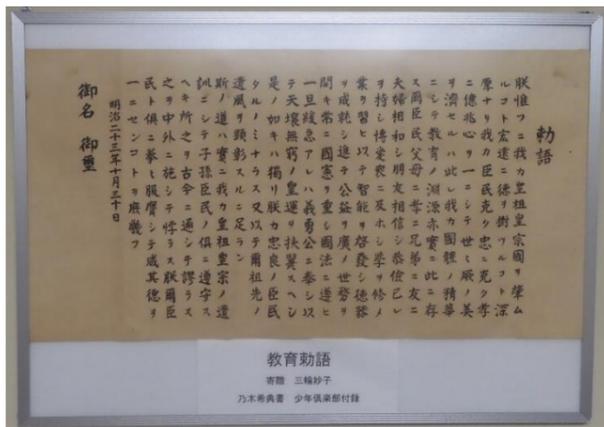


戦争と教育

「教育」は、どんな社会を目指すのか、何を「善い」こととするのかに大きく影響するものです。人々の価値観が大きく変化していった、太平洋戦争の最中から戦後にかけて、教育のあり方もまた大きく変わっていきました。「教育」のあり方から、当時の激動の社会が見えてきます。

・教育勅語



太平洋戦争までの教育の基本方針を定めたもの。卒業式などの式典で校長が奉読(朗読)した他、児童にも全文の暗唱が強く求められました。親孝行などの12の徳目が述べられており、12番目の項目として「天壤無窮ノ皇運ニ扶翼スベシ(天皇が治める国の為に盡くさなければなりません)」と書かれています。

・木銃(軍事訓練)

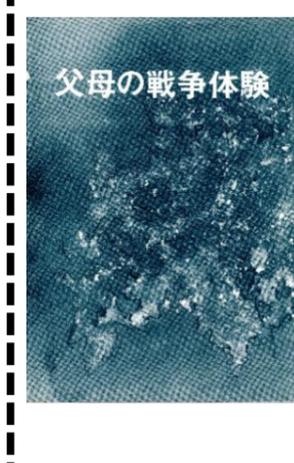
体錬科(体育)の授業の一つに、軍事訓練がありました。右の写真は、代沢国民学校の生徒たちの疎開先での授業の様子で、手に持っているのは木銃(木製の模造銃)です。平和資料館では、木銃の実物も展示しています。



・墨塗り教科書



終戦後、昭和20年9月20日の文部次官通牒の指示により、それまでの国定教科書の内容のうち、戦意高揚に関する部分などが塗りつぶされました。戦争が終わり、教育方針を根本から転換する必要に迫られたことを示すものです。



『父母の戦争体験』
p.10ページより

天皇のために戦うこと、死ぬときに兵士たちが「天皇陛下万歳!!」と言うことは当然のことであり、何の疑問も持たなかった。(中略)

今にして考えれば、「朕惟ウニ……兄弟ニ友ニ夫婦相和シ……」たりすることがすべて「天壤無窮ノ皇運ニ扶翼スベシ。」ということになるのだから驚く。個人の生命も、家庭も幸福もすべて、天皇のため、国家のために捧げられていたのである。